

「殺すな」

稲垣明宏

「殺すな」

ベトナム反戦の強い怒りを、嘆きを、哀しみを、この3文字は載せてアメリカへ轟いた。1967年、ワシントンポストには英語ではなく、この3文字の日本語が掲載されたのだ。「殺すな」……この言葉を知っている世代は、少なくとも20代の私の周りには居らず、10代ともなるとなお極僅かであろう。然し、今の世界にこそ、あらゆるものが簡略化され、ハイスピード化してゆく現代にこそ、この言葉はより血気迫る必要性に駆られているのだ。

「核なき世界を」

2009年、合衆国大統領就任から僅か13日しか経たないスピーチで、バラック・オバマ氏はノーベル平和賞を受賞した。そして退任間近の2016年5月27日、広島県のあの原爆ドームが目下に見下ろす平和公園で、彼は核なき世界への実現を願って被爆者に会い、その出来事はあらゆる新聞の一面を飾った。然し、彼のすぐ隣をピツリ歩いていた軍服の男には、不気味に黒々と光る、あらゆる光を吸収するようなアタッシュケースが握りしめられていた。核発射命令プロトコルの搭載された「核のフットボール」である。

私は新聞に掲載された、あの美しく飾られていた「歴史的瞬間」の一枚に、全く感動を憶えない。貴方は最も完全に完成された美しい「美談」として合衆国の歴史を描いたのかもしれないが、同時に核兵器発射の命令装置を公然と持ち込んだ「事実」は、決して朽ちることなく歴史の汚点として刻まれるのだ。

バイデン大統領も等しく、その功罪を思い浮かべねばならないだろう。彼はオバマ政権の際の副大統領であり、そしてオバマ政権の継承を掲げて当選した。トランプ政権の保守化した前代未聞の国家運営に、全世界は恐怖した。4年前の大統領選挙で貴方が繰り返したフレーズは「トランプ打倒」だったが、果たして貴方は彼よりも立派な大統領と言えるのか？

ロシアによる暴虐的侵略から始まったウクライナ戦争は、更に泥沼の「下り坂」を見事に転がり落ちている。あの1945年8月15日まで私達日本人が総員転がり落ちたあの「下り坂」だ。アメリカの政策としてはウクライナへ供給したアメリカ産の兵器によるロシア領土への攻撃を一部容認した。そして一方では、次期大統領選を見据えてこれから有権者に、耳に甘い甘い囁きを繰り返すのだろう。「平和だ、平等だ」と。

1945年8月6日、9日、原爆投下を決した一枚の紙切れに、私たちは殺された。広島約14万人、長崎約73884人(長崎市原爆資料保存委員会の昭和25年7月発表の報告)。その紙切れにサインした大統領は民主党だった。今や、世界の覇権を握らなくなったと言わなくなった今でも、アメリカは核を最初に保有した国として、そして人類に対して使用した国として、大きな道義的責任を負っている。バイデン大統領、貴方は「核なき世界を」と標榜したオバマ政権の継承者を自負していた筈である。

そしてオバマ氏は、原爆の悲惨さと廃絶促進の為に広島に来た筈である。しかしそれも前述の切り取られた写真に過ぎなかった。臨界前核実験をアメリカが実行し、広島原爆平和記念資料館にある地球平和監視時計はリセットされたのだ。

最早、口だけの時代は要らない。マヤカシの言葉は要らない。我々人類は多くの平和理論や哲学、概念、あらゆる理屈をこねくり回して核廃絶の実現を先延ばしにしてきた。貴方もその一人なのだ。

ジョー・バイデン大統領。貴方もその一人なのだ。人類に初めて核を落とし、その投下命令書にサ

インした政党の最高責任者として立ち、そして合衆国大統領という大きな平和への責務を担う国家の首長なのだ。

だがそんな危急存亡の事態には目もくれず、貴方も一つの紙切れに執着している。再選という、そして貴方の名前が書かれる「投票用紙」だ。ハリー・S・トルーマンがオーバルオフィスで執着したであろう一枚の紙切れ、すなわち「原爆投下命令書」と、あなたの「投票用紙」。世界はそんなたった一枚の紙切れに左右されるのか。

私たちはたった一言を貴方へ送る。それは1967年のワシントンポスト紙という一枚の紙切れに載った言葉だ。たった一言、たった一言だ。それには複雑な理屈も利害もマヤカシも存在しない。日本の、広島、長崎、世界の、人類の言葉。愛、正義、希望、友情、平和……。あらゆる意味を包括している。ウクライナの思いがつかまっている、今も世界中で血を流している人々の思いがつかまっている、貴方が再び建設を開始したメキシコ国境への壁に阻まれた命たちが叫んでいる思いがつかまっている、貴方が許可した臨界前核実験を視た世界中の絶望がつかまっている、貴方がトランプと同化したと自白した移民への取り締まり政策への慟哭がつかまっている、オバマ政権と同じ美辞麗句のマヤカシの暴露がつかまっている。

「殺すな」。ただそれだけだ。